

アーモンドの花

島永 嘉子

百合は二〇〇五年、ヨルダン・シリア・レバノンのツアーに参加した。ほんとうは、一人でシリアのダマスカスだけに二週間は滞在したかった。洋介に何通も出したメールのたった一通の返事が「都合がつかかわからない」と素っ気なかった。洋介の薄情はわかっていたのだけれど、ガイドなしでは難しいので、ダマスカスに三日いるこのツアーを選ぶほかなかった。

ホームからダマスカスのホテルにバスで到着すると、頬に髭をはやしてシリア人にも見える洋介がロビーで待っていた。戸惑った百合ににんまりした。あまり笑わない男だから珍しい。

「何でシリアにきた」のつけから、挑戦的だ。

「わからない。ダマスカスは洋介がいるから」 答えたくはないのに。もう、仲違いしていた昔の二人になっている。「喧嘩相手がいないのか。もう四〇だろう。ふらふらしてんなよ」「三八歳よ、多いほうに間違えないでね。シリアは六年も私の中に居座っているの。ダマスカスもパルミラもあの武将の

サラディンも、なぜか洋介も」「口も悪い、相性も悪い洋介か」「ひえー同じこと思ってる。相性悪いの、確認したくなかったの」「そんなんで、ここまで来るなよな。用事もないなら帰るよ。こんな高級ホテル、俺には不釣り合いで、居心地が悪い。」「三分もせずに、立ち上がる。縫れたTシャツに薄いジャケットを羽織っている洋介は、日本にいたときより肉がこそげ落ちて弱々しく見える。

日本にいるときも、定職に就くのを嫌って、翻訳やアルバイトで暮らして、洋介は外国語を学び続けていた。雑誌の編集をしていて英語さえろくに出来ない百合には、変わり者の天才に見えた。英語、ドイツ語、ポルトガル語、そしてアラビア語に取り憑かれるようにのめり込んでいった。日本人の枠から外れるには、「アラビア語がいい」と、訳がわからないことを言って、準備に二年かけて、シリアに行ってしまった。

洋介と一年同棲してから、別々に住み、適当に行き来して三年経っていた。もっと自由になりたがる。洋介はこの国の人とも率直に付き合える友人になれる世界人だった。

百合が縛ることは出来ない。

歩き始める洋介に、「熱いお湯の出るお風呂があるけど」と言うと、足を止め、百合を見つめる。「大丈夫。誘惑なんかしないから。私たちはこれから夕食なの。それに、小さい用事もあるし」「わかった。風呂よばれていくよ。もう二年くらい熱い風呂入ってないからな」

その六、七年後にシリアのアレッポが、激しい爆撃を受けた。オリーブと月桂樹の薫りが漂う風格のある古い石鹸工場で、恥じらいをほんのり頬に浮かべ一生涯英語で説明をしてくれた女性は二十歳だった。艶やかな微笑みを絶やさなかった。結婚し子どもを生み、生きのびてほしい。

二〇一五年になっても、シリアの戦乱の報道は続いた。

黒煙と炎が吹き上がり、人々が瓦礫の間を逃げ惑う。ぐったりした少女を両手で抱きかかえ、若い男性が顔を苦痛にゆがめ、『妹が撃たれた』と逃げてくる。

破壊された石造りの家の前で、亡くなった娘を膝に横抱きにして父は背を丸め全身を震わせ嗚咽し、涙を流している。シリアの普通の生活をしてきた人々が殺傷され、苦難に襲われている。長い豊かな歴史を秘めるパルミラの遺跡が破壊されるとわかりながら、世界中が無視をした。

シリア戦乱のニュースを聞く都度、レバノンに近いシリアの外れにいた、緑色の服を着た少年を想う。

パレスチナから追われた人やベトウインの人が住まいを奪われて、難民となって暮らしているテントの前だった。百合を見て、その少年は後方にいる父親に視線を走らせ、カメラの方へかすかな哀しみを浮かべ黒い瞳を向けた。卵形の顔に大きな目、しっかりと鼻筋、眉は一直線に整う。十歳くらいだろうか。光りを消した瞳だけれど、その誇りと賢さを消

すことは出来ない。テントは綺麗に整理され、十人以上が十分に暮らせる広さだった。一緒にいた日本人が、「そうやって、日本人はこちらの人を甘やかす」と言う。二十ドル紙幣をだそうとしていた百合は慌てて五ドルを渡していた。二十ドルが惜しいなんて思いもしなかったのに。

バスでレバノンに向かって走ってから気づいた。母親や姉妹もいただろう。少年は男として、家族を養うための働きをしていた。そのため耐えて写真が写されたのだと。

少年の瞳に封印された激しい思いが吹き出すこともあるのか。その後、日本人への嫌悪が増幅したのではないか。

少年は兵士にならざるを得なかったのではないか。百合はその想いに刺され、いまだに自己嫌悪に落ちる。

洋介はいなかった。『明朝、六時にホテルの玄関の前で』と書き置きがあった。

翌朝、洋介はタクシーでダマスカス郊外の小高い丘に連れて行ってくれた。染井吉野の花よりは小ぶりの白い花をつけた木々が目の前に広がっていた。「前に、アーモンドの花が見たいと言っていただろう」宝石に似た深い青空の下一面が白い花のほのかな香りに揺れる。「ちいさな用事って何だ」

洋介の横顔に囁く。さよならのキスをして。好きだった人さようなら、と百合は胸の裡で言う。

洋介から、ごくたまに「まだ生きている」とメールがある。